

2019. 10. 3

佐藤しのぶさんがお亡くなりになった。61才だった。早すぎるのではないか、あまりにも……。ボクの6才年上となる。先日は世界のソプラノのジェシー・ノーマンもいってしまった。

佐藤さんはぼくらにとってはまばゆいばかりの存在で、恒例となっている年末のN響の第九公演では9年にわたってソプラノのソリストを務めた。N響の第九は最近は変わってきているが、かつては合唱が国立音楽大学と決まっていた、国立音大の出身の人たちが「私、しのぶさんの背中をみてN響の第九を歌えたんですよ」と誇らしげに語っているのを何度もきいたことがある。これも年末の話だが、NHK紅白歌合戦にも出演されて、声楽やオペラを広めた存在だったといっていいただろう。

ボクも恥ずかしながら共演というか、同じステージに立たせていただく機会が1度あった。もう10年以上前になるかな、佐藤しのぶさんのコンサートの伊賀公演が伊賀市文化会館が行われた。地元の合唱団が共演するステージも設けられて、合唱団の練習を担当することになった。伊賀上野ということで、松尾芭蕉の歌を歌うこととなったのだ。佐藤しのぶさんと共演できるということで、多くの人が集まって、本番はなんとまあボクがテノールのソロを歌うことになってしまった。「まあ、たった4小節やからいいかあ」ってなもんで無理矢理引き受けてしまったが、今思い出すとただただ赤面である。佐藤さんは楽譜1ページ分ほどあるソプラノソロを歌った。ストーリー仕立てにしてみたいとアイデアを出したりして、コンサートを少しでもいいものにしようとする気持ちが伝わってきたのを思い出す。終演後、立場を利用して楽屋を訪問して、一緒に写真を撮ってもらったり、サインをしてもらったりしたのだが、終始にこやかに、楽しそうに接してくれた。今から思うと、確固とした考えをお持ちだったのだろう。その時に撮ったはずの写真を一生懸命探すのだが出てこない…。もう彼女が歌う姿も、後ろ姿もみることはできない。



2019. 6. 6



ラトヴィア放送合唱団の津公演を聴いた。

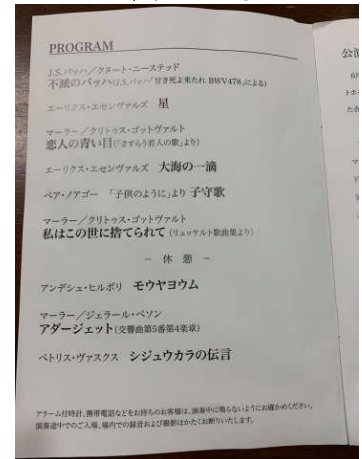
ラトヴィアはバルト三国の中の一國、北のエストニア、南のリトアニアにはさまれている。北欧は合

唱が盛んで、レベルの高い合唱団や声楽グループがゴロゴロある。

ラジオ（放送）クワイアーにしるオーケストラにしる、ラジオに関わるものはコンテンポラリーな作品を大切にレパートリーにしている。今回のプログラムもマーラーの編曲ものと現代の合唱曲である。演奏会自体は1時間半、歌っていたのは60分弱だったと思うが、十二分に堪能できた。

とにかく現代的な作品もバランスが抜群で、ソプラノがメロディを主張したりしない。あくまでもよく響かせながらハーモニーを構成していく。ブルックナーやラインベルガーなんかをやっているとつくづくと思うのだが、メロディとハーモニーというホモホニックな概念ではなく、とにかくメロディもハーモニーを構成していて、とにかくハーモニーがその場で響き続けているという感覚なのだ。日本の合唱はメロディが王様すぎるのではないかとまで思うのだ。アンコールで歌われたラトヴィア民謡らしき曲は生き生きとして、メロディラインがはっきりし、バンバンそれが飛んできた。ボクの感覚はおそらく間違っていないと思ったのだった。

三重の合唱関係者だけではなくて、名古屋や岐阜、関西のよく知れた顔も多くあって、とにかく、すごいものを聴いたなと思える演奏会だった。



2019. 6. 1 祭りの後



先週土曜日が演奏会だった。

もう10年も続けてお声かけいただいているこの演奏会。最初は源田俊一郎編曲「ふるさとの四季」だった。あの時の高校生たちはもう30歳手前。もう社会で十分活躍してるんだろう。今もなんらかの音楽との関わりを持ってくれてたらうれしいな。生徒たちは変わっていくのだけれど、やはり受け継がれていくものも多くて、やり始めた頃とは充実度はかなり違っているように思う。

今回の曲についてはなかなか手強い曲で、どんなふうにアプローチすれば生徒たちの心に届くのか、お客様にどうすれば効果的に届くのか、ああでもないこうでもないと悩んだが、終わってみるといつの間にか「二度とない人生だから…」なんて口ずさんでる自分に驚いている。

もちろん、演奏っていうのは自分たちが練習の中で見つけてきた曲の素晴らしさや曲への「思い」のようなものを会場へ届けることなのだが、同時に生徒たちが様々な音楽の魅力に気づき、長く音楽を愛してほしいと思う。そんな思いは年々強くなっていく。

2019. 5. 14 演奏会のテーマは「昭和」

今夏の合唱団Rinteの第12回定期演奏会のテーマは昨年に引き続いてオールアカペラプログラムだ。そして、「昭和」をテーマにした。20世紀後半、つまり昭和の

なかでも戦後に日本の音楽は大きく変化・発展する。合唱の分野においても多くの作品が書かれ、「名曲」といわれるものが多く書かれた。しかしながら、平成に入っても多くの合唱曲がかかれ続け、多くの「昭和の名曲」が忘れられようとしている。そこで、「昭和」の合唱曲に光をあててコンサートを組んだのだ。

コンサートの締めくくりに信長貴富さん編曲「アカペラエンカ」をもってきて、アンコールにはその流れで信長さんの編曲ものをもう1曲。そして、最後に千原英喜さんの曲。この曲は平成に作られた曲なのだが、昭和色プンプンで選んでいます。そして、最後の和音が明らかに「武満トーン」がPで響きます。それもあって、オープニングに武満徹さんの「明日ハ晴レカナ曇リカナ」をもってきて武満さんへのオマージュとしています。

チラシもいつもながら素晴らしくて、今回の昭和っぽさも半端なくいい！

Rinte 合唱団 第12回定期演奏会 オールアカペラ プログラム

アカペラエンカ

2019.7.28(日)
13:30開場 14:00開演
なら100年会館 中ホール

指揮 柏森和重

入場料
前売1500円
当日1800円
高校生以下
500円

2019. 5. 11 YELL

今年もまたNコンの季節がやってきてる。今年も既に楽譜が届いていて、楽譜を読み、分析をし、与えられるその時に備える。クリニックみたいなもので、与えられた時間のなかで「症状」を診て、修正しつつ、曲の本質に迫る。楽しくもあり、厳しい時間だ。

Nコンといえばとても印象に残っている曲が二つある。中学生の部がいわゆるポップス路線になってからの曲だが、アンジェラアキの「手紙」といきものがかりの「YELL」だ。「手紙」も「YELL」も直接的に思春期の心を描く。「手紙」は国民文化祭のワークショップとその成果発表の演奏の指揮を担当したときの1曲で、ブラスバンドの伴奏と京都じゅうの少年少女合唱団が集まったんじゃないかと思えるほどの人数が学研都市の「けいはんなホール」に集まった。もう10年前になる。

「YELL」は大人の合唱団とも演奏した。やはり大人は客観的に咀嚼して歌えるんだけど、中学生たちは「自分の心の中にある言葉にしていいた」ってことが本当の意味でわかったときの共感の度合いが凄かったことを覚えている。

ごく最近、本屋でふらふらしていたら（本屋さんでどんな本があるのか俯瞰的に見て回るのが好きなのだ）、この「YELL」を作ったいきものがかり水野良樹さんがかいた「いきものがかり」というエッセー集を見つけた。手に取ってみて、その文章のみずみずしさに驚いた。そして、彼自身が思春期に友だちと口がきけなくなったり、不登校になったりした経験を持っていることがわかった。ボクの中で「僕らはなぜ答えを焦って宛てのない暗がり到自己（じぶん）を探すのだろう」「僕らが分かち合う言葉がある ころからころへ声を繋ぐ YELL」という言葉が体中を駆け巡って、いつの間にか涙が止まらなくなっていた。Nコンの本選をテレビで見

たが、最後に会場のすべての中学生が歌ったYELLに強く心を揺さぶられた理由が本当の意味でわかった瞬間だったのかも知れない。

言霊といわれるように言葉には間違いなく力がある。そして、実際に呼び交わす言葉にはその数倍の、計り知れない力があるのだろう。改めて、言葉のある音楽に携わることができる幸せと、その深さに背筋が伸びる思いでいる。

2019. 4. 26 チームトークを！

「この頃、わが棒振りはコミュニケーションや！その中でもダイアログや！とよく言ってるなあ」と感じている人も多いのではないだろうか。そう！音楽における対話（ダイアログ）は非常に大切に、特に、アンサンブルにおいては生命線でないかと思っています。

アンサンブル（合唱）はグループ（チーム）でやっているのですから、組織的な秩序というのは一定必要なのかもしれません。しかし、それ以上に大切なのは、私たちの歌を魅力的なものにすること、納得できるものにすること、熟成することです。熟成するためには、言葉による伝え合いだけではなく、アイコンタクト、仕草などでの伝え合いがいいですね。パート内やパートを超えた意見交換や伝え合いにより意思疎通を図り、ハーモニーを、歌を深めていきたいですね。練習中に指揮者が他パートに指示をしているときにそれを聞いて自分の歌を考えるもよし、パートの中で今歌ったことや指揮者の言っていることの共有、上手くいってないところを共有するもよし、上手くいってるところをたたえあう、改善点を共有する。これ、「チームトーク」って言います。何もリーダーやミドルリーダーだけが伝えるだけがトークではないのです。指揮者だけの力なんて知れてます。全員プレーで、魅力的なアンサンブルを！みんなに聞いて欲しいときは「きいて！」とか、「ちょっとやかましい」っていいいますから。最後の振り返りだけでなく、賑やかにチームトークしてみませんか。

2019. 4. 21

今日は午前中、伊賀上野で高校生たちとのリハーサルだった。

高校生たちとはもう10年になるだろうか、毎年春に音楽系の部活動が集まって定期演奏会をやっていて、ボクがずっと合唱の指導と本番の指揮をやってるわけです。

今年はなんだか出足が悪くて、4回の練習とゲネのうちの今日が2回目だったんだけど、まだなんだか曲が読めてない。シャーないから、譜読みに付き合いながら声作り、響きづくりを並行してやっていって行った。もちろん、機嫌悪くなったり、怒ったりはしてない。音楽って強制されてやるもんじゃないもの。話を入れたり、エピソードを盛り込んだり、アンサンブルで大切なことをみせて説明したり…。最初は貧弱だった歌がだんだんとしっかりとしてきて、そして、どんどんが響きが大きくなって行って、また、高校生たちとそれを共有しながら、確かにしていった。

アプローチはいつも、どこでも同じ！①音符を言葉で読んでいく ②声ではなく、息で響きを大きくする ③耳を開く 最後には自分たちでも驚くほど豊かなハーモニーと響きに変わっていった。そこで、次回に向けて、「アンサンブルをする上で

自分の担当する音を自分のものにしてアンサンブル練習に臨むのは当たり前のこと
ちゃんと事前に準備して臨んでる仲間に失礼である」「多くの人とともに奏でる
アンサンブルの練習は1人ではできない」とともに経験をして、(音楽的な)対話を
することで熟成していく」「練習を重ねる中で自分たちが見つけたり、素敵だと思
ったことを今度は自分たちの音楽を楽しみにし、応援してくださる人にちゃんと伝
えること」の大切を伝えた。そして、最後の最後に、「今回の選曲は4月に転勤
した前顧問先生の選曲 先生がなぜこの曲を選ばれたのかを自分たちなりに答えを
出して届けよう」と話した。

ボクはおそらく教えることが好きなんだと思う。やって見せ、具体的に変えて、
そのことを褒め、価値づけることを大切にしているつもりだ。でも、それ以上にもっ
ともっと大切にしていることは、「その気にさせること、心に火をつけること」だ。
次回、どんな風に彼らの歌が変わっているか楽しみにしているし、次の戦術を練って
いる。

2019. 4. 17

N響の定期公演生放送を聴いた。4月からやたらと自動車に乗る時間が増えて何を
聴きながら過ごすのかを考えている。読むわけにはいかないからね。山田和樹指揮
で現代物の演奏会。前半は矢代秋雄のピアノ協奏曲ともう一曲。河村尚子のピアノ。
河村尚子は西宮出身。もう本当に素晴らしい。初めて河村尚子を知ったのはもう6、
7年前かな。ノリントン指揮のN響、ベートーベンのピアノ協奏曲の4番。もうね、
ピアノコンチェルトの概念から十分はみ出た。今回は初めて聞く現代の曲だった
けど、もうね素晴らしくて泣けてきた。車を車庫に入れた後も終わるまで聴いてま
した。ほんまにもうバケモノです。何がバケモノって、人間が前に出てくる。音楽
との対話、オーケストラとの対話、指揮者との対話、聴衆への語りかけ。ピアニス
トでいて欲しいけど、指揮者になりたい、ピアニストにしておくのは惜しい！っ
て思うほど。ボクの中では初めて彼女のピアノを「みて」から、ボクの中では河村
尚子が最高のピアニストであり、数少ない優れた音楽家です。

2019. 4. 15

読もう、読まなきゃと思い続けて、今日こそと思いカバンにひそませた「楽譜に
書ききれなかったこと リフレイン 信長貴富」を読ませていただきました。あり
がとうございました。温和な信長さんがこれほどはっきりと、しかも踏み込んでこ
の曲(というより音楽)に対して考えを述べていることに、驚きとある種の感動を
覚えました。「歌は自由の最後の砦」などは穏やかな語り口ですが、厳しい突きつ
けですね。ボクは直接的に平和や戦争反対を歌うことだけが平和や戦争反対を歌う
ことだとは思ってません。そういう曲もあっていいけれど、ボクにとっては共感で
きる、そして美しいものであることがとても大切です。歌うこと、音楽をす
ること自体が対話していることだと思っています。コミュニケーションの中でもダイ
アログ(対話)が尊い。それは、対話には相手を認め、きくからなんですよ。そ
のことにより、人と人が繋がり良きアンサンブルとなり、ハーモニーが生まれる。

音楽は人を尊重することなしには成り立ちません。例えば、1人で楽譜を読み込んでいる時も作曲家との楽譜を通しての対話があり、尊敬や感謝の気持ちを持ちます。

以前、私たちはなぜ歌うのか？とみなさんに問うたことがありました。「アンサンブルを追求し、究極の音楽の実現のため」なんだと思います。それは自分自身のためであり、私たちの歌を楽しみにしてくださる人に届けるためでもあります。そんなことをこの資料を読みながら考えてました。

2017. 8. 12

ぼくが係わっているEnsemble Clair, Kyoto（アンサンブル クレール、京都）とEnsemble Kiika（アンサンブル キイカ）がこの岐阜で、しかも、東海地区随一とまで言われるここサランカホールに集う

Ensemble Kiikaとは、このグループが活動を始める時からのお付き合いである代表のMさんの夢をきくうちに、ぜひ、岐阜でその夢を叶えよう！という気になった そんな気持ちにさせてくれる強い情熱なのだ 5年前の9月からKiikaの活動は確か、7～8人で始まった そもそもぼくはそんなに知られた存在でもないし、よくぞこのどこの馬の骨かもわからないのに集ってくれたと思う いかに毎回の練習の満足度を上げるかということと、いいアンサンブルにするかということ、毎回の練習への行き帰りに考えて考えて、考え尽くしたことを懐かしく思い出す もちろん初めから順風満帆というわけではなく、まさに集ってくれるメンバーの力が今のKiikaをつくりあげてくれた そして、これからのKiikaのことを考えるとその責任と楽しみとでドキドキワクワクするのだ

Ensemble Clair, Kyotoとは、昨年からのお付き合いである グループが立ち上がってからは指揮者を置かず、客演で指揮者を招いていたようだが、5周年記念コンサートを終えて、次に向けてということでお声かけいただいた 教会などを会場に昨年8月から始めた「華なりコンサート」はすでに3回を数えた 毎回、ユニークなテーマでコンサートを組んでいる

さて、今回のジョイントコンサートは、Kiika、Clairのそれぞれの持ち味が活かされることはもちろんだが、コンサートプログラムとしても聞き応えのあるものとした Kiikaの日本に歌い継がれて来た民謡や子ども歌、Clairのマジャール（ハンガリーの人たちは自分たちをマジャールと呼ぶ）の歌、そして、2つの団がともに奏でる「石若雅弥の心象」と「三善晃の唱歌の世界」 華やかな響きがサランカホールに花咲くものと思っている

2017. 6. 17

53歳になりました

もちろん音楽もですが、表面的なことに終始する生き方でなく、中身が豊かでありたいと思っています 先日、ひっそりと咲いたヒルガオを見つけました もしかししたら、だれも見つけてはくれないかもしれない でも、ひたすらにその花を美しく咲かせている ぼくもそんな風に生きていたい そう思うのです まだまだ迷い惑うことばかりですが、ひたすらに生きていきたいと思っています

2015. 01. 06 【演奏会はお祭だ！】

さて、今日のお題は演奏会だ。ボクは演奏会はある意味お祭だと思っている。もちろん、演奏会は自分たちの音楽的成長をお客様に問うものであって、プロであってもアマであってもその活動の最大場である。その中でも自らが主催する【定期】演奏会は最高の場である。あるアマチュア団体は定期という名称ではなく、音楽会という名称にこだわっていた。アマチュアだからこそ決められた期間で仕上げるのではなく、とことん音楽的に追求をするという意味で「音楽会」なのだそう。アマチュアとしてのプライドなんだろう。そういったこともあり、演奏会にはお客様には音楽に集中していただける環境を作りたいということを追求してきた。それがどうも「クラシック音楽は堅苦しい」というようなイメージになってしまっていて、なかなか会場に運んでももらえないということも悩みの1つでもある。もちろん集中して純粋に音楽に集中して音楽の深みや広がりを楽しんでもらうことが大切なのだが、一方、会場に運んで下さったお客様が「また来てみたい」と思ってくれる演出があってもいいのではないかと考えている。深みや広がりをもっと理解してもらえるための楽しい解説や演出があってもいいのではないかと考えている。それはステージ上だけではない。多くのオーケストラコンサートがやっているように開演前の室内楽ウェルカム演奏なんかもいいだろうし、アマチュアでは当たり前になっている演奏後のお見送りも、一部のプロオーケストラなんかで取り入れられ始めている。ボクが数年にわたって関わったコンサートではロビーでTシャツやカバンなどのグッズが販売されていたし、CDなんかを販売しているところもあった。記念の演奏会などでは記念品を配ったり、演奏旅行なんかでは自治体や企業の協力を得て物産品などを売ってもいいのではないかと考えている。ボクの貧弱な発想よりも、みなさんの得意なところでのアイデアが演奏会場にお客さんをお呼び呼ぶのだと思う。

音楽を磨くという「本業」をおろそかにしないで、それをもり立てていくアイデアが演奏会を豊かにするのだと思う。

2014. 12. 25

今年最終の合唱団Rinteの練習では、今後やっていきたいこと、やってみたいことを出しあってみるということとっても楽しく、興味深い1時間あまりを過ごした。皆さんから出てくるアイデアを見ていると考えることはそう変わらないんだなという感想を持った。

なんだかの形でまとめられたりするのだと思うが、若干の感想めいたことを・・・結構多かったのが「演奏旅行」。ヨーロッパや海外へというのが多かった。また、現実的にまずは国内で、「名張」でというのもあった。合宿先で(ミニ)演奏会をというのもあった。あと印象に残ったのは若い人たちが入ってくるように交流やジョイントなどをする。Rinteに若者がたくさん入ってきてほしいと思っている人が結構いるということ。演奏会にお客をお呼び呼ぶためにも人が集まるようなところ

での演奏を！というものやオーケストラとの共演というのもあった ヨーロッパの曲や柴田南雄の作品をもっとやりたいというのもあった こうなったら良いなあ・・・・と出していただいたものも多かったかも知れないが、ボクの感覚からすると、どれもそんな夢物語ではないということだ

合宿でのコンサートは実はボクが今年の赤目で「コンサートやったらいいやん」と呟いていた 若いときに所属して振っていた合唱団うたおにでは、うたおにが合宿にくるという情報が流れると、「コンサートをしてくれないか」という申し出をよくいただいていた ボクが覚えているだけでも、南島町、湯の山温泉、岐阜県の高山など 小学校の体育館もあれば、ちゃんとしたホールもあれば、ホテルのロビーのようなところもあったように思う

若い頃に指導していた大学生の夏合宿でも何度かミニコンサートをさせてもらった 演奏旅行をするというのはRinte創立当初からよく語られていたことで、未だに温め続けているというわけだ 音楽を含めた文化団体が赤字でないなんてことはまったくなくて、NHK交響楽団であっても海外公演をするときにはその資金をどうするのが大問題になる 海外公演だけではなく、普段の定期公演などでも協賛などをたくさん取ってやっているオーケストラや合唱団が例えプロであってもすべてという現状である いろいろと研究してみる価値があるのだろう

ただ1つははっきりと言えることは、自分たちの本業はおろそかにしていけないと言うこと Rinte Visionにも書いたが、あくまでも私たちは「合唱音楽を追究」するのだということ そしてその成果を世間様に問い、Rinteの歌が良いなという人に届け続けるということだ

私たちは私たちのために歌っているのだが、もはやそれだけではなく待っていてくれる人が少なからずいるということも心に刻んでおくことが必要だ この数年間多くの方の努力と情熱で飛躍的にRinteは向上したと思う 1年の活動に見通しを持つことができ、その集大成としてのホームコンサートや演奏会を位置づけていただいている やりたくてもできない合唱団が多い中、Rinteはそれを獲得したと言える

これをベースとして、皆さんの知恵と情熱を結集してその活動にバリエーションや工夫、新たな視点を加え、みなさんの「夢」を叶えていくのだと考えていた

この18年間Rinteと係わり続け、これからも常任指揮者としてのイニシアティブどう取っていくのか 責任を感じながら・・・

2014. 12. 19【選曲の悩み】

前回の【演奏会に向かう背中】にはいくつかのご反響をいただいた ありがたいことである そのうちの一つはある合唱団の選曲について 絶賛状態のお褒めの言葉にこれまた気を良くしている と同時にどこかくすぐったい感じもする

選曲については本当に悩みの種である ボクに全く任されることもあれば選曲委員会と一緒に進めることもある 客演などの場合は「この曲を何回の練習で！」と言うパターンも多い 知ってる曲のこともあれば全く知らない曲のこともある いずれにしても楽譜やスコアを読んで準備することには変わりはない レギュラーに関

わらせていただいているところの選曲は悩ましい 演奏会のプログラムビルディングとしての側面もあれば、その曲をやることでどれだけ力を伸ばせるかという育成の意味もある その両方を勘案して曲を選ぶのだが、とても悩むし、決めた後もその悩みが付きまとうこともある 背伸びしすぎて歌う側を追い込むばかりで楽しませていないのではないかと思うこともままである 練習でうまく成果が出ずにイライラしてしまうこともある 自己嫌悪に陥ってしまう 演奏者のせいにしてしまっている自分が時折いる でも、本当はうまく導けない自分がダメなのだ

演奏会ではもう少しだけ練習がしたいというくらいが理想的なのかもしれない 曲を持ちすぎて新鮮さがなくなりマンネリ状態が最もよくない お客さんにすぐばれてしまう…

棒振りは演奏会の練習が始まるずっと前から演奏会を組み立て、曲の勉強をして準備をし、本番の最後の最後までその曲と演奏者にとことん関わる 自分では音を出さないが、曲と演奏者にどっぷり深入りする

2014. 12. 17 【演奏会に向かう背中】

とんでもない寒さに包まれている日本列島だが皆様のいかがお過ごしでしょうか？ 実はボクはフェイスブックもブログもやっていて、自分の情報の発信もやっているのだが、フェイスブックなどはいわゆる「おともだち」の情報も入ってくる

ボク自身もご一緒させていただいたことのある、あるアマチュア・オーケストラの演奏会が近づいていてその演奏会に向かうフルート担当の本練習前の個人練習をする後ろ姿の写真が目に飛び込んできた

写真であってもその真剣度合い、音に向かい合う姿に半ば感動を覚えた 隣の部屋からは弦のパート練習の音が聞こえてくるとコメントされていた・・・

だいたい関西のアマチュアのオーケストラの場合、年に二回の定期演奏会をやっている

ボクもその演奏会に呼ばれて振らしてもらったことがあるが、演奏会に向かう姿は真剣そのもの 身銭を切って、時間をそれに費やしてもやっぱり音楽が好きで、音楽の醍醐味、演奏会の快感には代えがたいものがあるのだろう

音に向かい合うということはこういうことだ アマチュアであろうがプロであろうが、技術や経験には差こそあれ、音楽を愛する気持ちには差はないはずだ アマチュアの方がじっくりと時間をかけて音楽に向かえるとも言えるかも知れない・・・

コンクールに挑戦している合唱団などはたった10分ほどのコンクールの本番の演奏のために交通費や宿泊費や諸々・・・をかけてもその舞台の快感、そして、演奏に対する評価のために挑戦し続けている

様々なスタンスがあっていい！自分たちは自分たちである しっかりと音楽に向かい合っていけば良いのである

ボクたちは音楽に向かい合う後ろ姿はカッコイイだろうか そして、一人ひとりが胸を張って演奏会のステージに立てるだけ楽譜に向かい合えるだろうか・・・

自分にも問いかけている

2014. 12. 13

今年もあと半月あまりとなった 今年を振り返りながらこれからのことを描いてみたい

6月1日になら100年会館でコンサートを行った 満員のお客さんにきいてもらい、しかもとても素敵なホールで演奏ができRinteにとって大きな収穫だった プロであってもアマであっても活動の基本は自分たちの演奏をきいてもらうことである そして、自分たちの活動を問うのはできる限りの条件の良いところで行なう

NHK交響楽団はNHKホールの音のよくなさに何度も改修をさせたし、ついに月に3度の定期公演のうちの一度をサントリーホールで行なうことを認めさせた それほどいいホールで行なうことは大切である ホールも大切な楽器だからだ どんどこでもちゃんと響かせることのできる声や演奏を目指しているが、やはり基本になるコンサートは良い条件を選びたい そして、暑い中を早くから行列を作ってくれた、これは大和郡山でもそうであったが…、お客さんがまたきっと私たちRinteの演奏を心待ちにしてくれていることも決して忘れてはならない 指揮をしていると音楽は決して僕たちだけでやっていないことを痛感する 背中でお客さんの後押しを感じることや一緒に音楽していることを感じるからだ もちろん、やりにくい時もある… これはみなさんのおかげなのだが、Rinteのお客さんはとてもやりやすい そして、回を重ねる度にお客さんの音楽に対する期待と集中力は上がっている Rinteはもちろん自分たちのために歌っているのだが、Rinteの歌を待ち、応援している人が増えてきていることを忘れてはいけないと思う

実はRinteの今後の指針となっていくRinte Visionなるものをこの秋スタッフのみなさんに提出した そのビジョンは合唱音楽、教育、地域の3つの柱からなる そのビジョンを具現化するためにみなさんに次の時間の練習時にやってみたい活動などを出してもらうのだ どんなものが出てくるのかとても楽しみにしている

この頃、団員の皆さんからRinteは上手くなったというがそれは本当なのか？どれくらいのものなのか？とよく尋ねられる ボクは現状のような活動では日本中で最も多くの合唱団と定期的にかかわり、客演もこなしている棒振りの一人だと思うが、そのボクがすごい！とRinteとの音楽の中で感じるが増えている それだけでは不十分だろうか？そして、本当の凄さは私たちが歌いながら見つけていけばいいと思っている 練習を積み上げ出て、曲の素敵さを描き出し、コンサートという特別な場所で、そこでしか見つけられない音楽を体験して、より高みを見つけていくのだと思っている ぼく自身三善晃の嫁ぐ娘にを歌っている時、会場のお客さんの多くが涙して感動の輪が広がり、演奏後舞台裏でメンバーと抱き合って泣いた経験がある そんなことをRinteのみんなと経験してみたい

今年も楽しかった！みなさんにただただ感謝である そして、来年もとっても楽しみである